

知 識 探 訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

変わりゆくボルネオ、戦争の記憶

井上真（東京大学大学院農学生命科学研究科教授）

ゆったりと流れるマハカム川を遡る客船から夕日を見る機会がだいぶ少なくなってしまった……。人々が操る船外機付き小舟が行き交う川の兩岸には、集落や果樹園、そして二次林が広がっている。インドネシア共和国東カリマンタンの州都サマリダ市の港を朝発ち、上流に広がる先住民ダヤック人の居住域へ向けての川の旅は、いつも心の洗濯になる。

1990 年代までは、上流域で伐採された太い丸太は筏に組まれ、船に曳かれて下流の合板工場まで運ばれていた。しかし、今では船で上流に向かう途中でその丸太の筏をあまり見かけなくなった。代わりにすれ違う回数が増えたのは石炭輸送船、それに上流で製材された木材やチップの輸送船である。客船の速度も格段に速くなった。マハカム川の中流から上流にかけて広がる西クタイ県都まで丸 2 日かかっていたのが、今では 1 日で着く。そればかりか、道路が整備されたため自動車を使えば 8 時間ほどで行くこともできるようになった。

先住民の集落周辺の景観を見ると、以前からの焼畑休閑林や籐園のほか、果樹園やゴム園、それにアブラヤシ農園も拡大しつつある。スハルト政権崩壊後の地方分権の熱狂と混乱が一段落し、自らの将来を自ら決められることができる可能性を得た人々は、試行錯誤の真ただ中にあるようだ。地方行政や地元企業も、バイオ燃料ブームや地球環境問題関連の動きの中で暗中模索の状態にみえる。

さて、私が 1980 年代後半にボルネオ中央高地（アポカヤン地域）のケニア人の村に滞在したとき、第二次世界大戦のときの話をいくつか聞いた。南のマハカム川流域から山越えてきた日本軍が予想以上の速さで攻め入りオランダ軍をあっという間に制圧したこと、そしてケニア人に大きな穴を掘らせ、そこに家族を含むオランダ人のすべてを殺して埋めたこと……。オランダ人が埋められた場所には戦後になってから人数分の墓標が建てられた。その墓標の残骸を私はこの目で確認した。日本語で覚えているのは「バックヤロー」だけであるという老人と会ったりもしたが、第二次大戦中の日本軍の話聞く度に胸が締め付けられる思い

をした。

それから 20 年後の 2009 年、学生の海外実習の引率でマハカム川上流を訪れたとき、山越えてアポカヤン地域に攻め入った日本軍を案内したバハウ人の老人に偶然出会った。その老人の年齢は、マハカム川上流の L P 村が正式に設立されたとき彼はすでに物心がついていたこと、および L P 村が設立後 103 年経っていることから、およそ 115 歳と推定される。彼は、日本軍の道案内をする数年前にオランダ軍の案内もして軍備などの情報に通じていたこともあり、日本軍に雇われたという。76 人の日本兵が L P 村を出発したのは朝 5 時半。滑る急斜面では体をひもで縛って上から引き上げながら猛進し、翌日の朝 8 時にはオランダ軍が駐留する L N 村の対岸の山中に到着したという。地図で確認したところ直線距離およそ 100 キロメートル。しかも険しい山道。信じられないスピードだ。オランダ軍が日本軍の出発を知ったのは夕方になってからだったらしい……。

20 年前にアポカヤンで聞いた話を裏付ける証言であった。当時のケニア人、バハウ人、オランダ兵、日本兵……それぞれが置かれた厳しい状況と気持ちをおもんばかるとやるせない。私に出来ることは、フィールド研究を通して友好関係をより強固なものにする努力を継続することだと自分に言い聞かせている。

< 筆者紹介 >

1960 年、山梨県生まれ。東京大学農学部林学科卒業。農学博士。農林水産省林業試験場、インドネシア共和国熱帯雨林研究センター（JICA 長期派遣専門家として東カリマンタンに滞在）、東京大学農学部助手、同助教授を経て現職。専門は、森林ガバナンス論・社会学、カリマンタン地域研究。ボルネオ先住民社会が長期にわたる市場経済化、および急激な森林開発や農園開発によってどのように変貌してきているのかを追い続けている。単著に『コモンズの思想を求めて：カリマンタンの森で考える』（岩波書店、2004 年）など、共編著に『フィールドワークからの国際協力』（昭和堂、09 年）『ローカル・コモンズの可能性：自治と環境の新たな関係』（ミネルヴァ書房、10 年）など。